

望月

季は	地は	シテ	小沢刑部
雜	近江	ツレ	安田庄司妻
		子方	庄司子息花若
		ワキ	望月秋長
		狂言	同従者

「かやうに候ふ者は。近江の国守山の宿甲屋の亭主にて候。さても某本国は信濃の國の者にて候ふが。

さる子細候ひて此甲屋の亭主となり。往来の旅人をとゞめ申して身命を継ぎ候。今日も旅人の御通り候はゞ。御宿を申さばやと存じ候。

ツレ女、子方
ツレ女サシ
次第
「波の浮鳥住む程も。く。下安からぬ心かな。

「是は信濃の國の住人。安田の庄司友治の妻や子にて候。さても夫の友治は。同國の住人望月の秋長

に。あへなく討たれ給ひし後は。多かりし従類も散りぐになり。頼む木陰も撫子の。花若ひとり隠し置かんと。敵の所縁の恐ろしさに。思子を誘ひ立ち出づる。

上歌
「何くとも定めぬ旅を信濃路や。

「月を共寝の夢ばかり。く。名残を忍ぶ故郷の。浅間の煙立ち迷ふ。草の枕の夜寒なる。旅寝の床の憂き涙。守山の宿に着きにけり。く。

女詞

「急ぎ候ふ程に。近江の国守山の宿に着きて候。此所にて宿を借らばやと思ひ候。いかに申し候。旅人にて候一夜の宿を御借し候へ。

シテ
「安き間の事にて候。さて是は何くより御上り候ふぞ。

女
「さん候是は信濃の国より上る者にて候。

シテ詞
「不思議やな是に留め申して候ふ御方を。いかなる人ぞと存じて候へば。某が古への主君の北の御方。

幼き人は御子息花若殿にて御座候ふは如何に。あら痛はしの御有様や候。やがて某と名乗つて力をつけ申さばやと存じ候。いかに御旅人に申すべき事の候。信濃の国よりと仰せ候ふに付きて。古へ御目にかかりたる様に存じ候。

女
「いや是は行方もなき者にて候ふ程に。思ひもよらぬ事にて候。

シテ
「何を御包み候ふぞ。まづ某名乗つて聞かせ申し候

ふべし。是こそ古御内に召し使はれ候ひし。小沢の刑部友房にて候へ。

女「さては古の。小沢の刑部友房か。あらなつかしやとばかりにて。涙に咽ぶばかりなり。

子「父に逢ひたる心地して。花若小沢に取りつけば。

シテ「別れし主君の面影の。残るも今は恨めしや。

子「こはそも夢か現かと。主従手に手を取りかはし。

地「今まで。ゆくへも知らぬ旅人の。く。三世の

ちぎりの主従と。頼む情も是なれや。げに奇縁ある我等かな。く。

シテ詞「あれなる一間に御入りあつて御休み有らうするにて候。

ワキ次第

「帰るうれしき故郷に。く。誰憂き旅と思ふらん。

詞「是は信濃の国の住人。望月の何某にて候。さても同国の住人。安田の庄司友治と申す者を。某が手にかけ生害させて候ふ科により。此十三年が間 在

京仕り候ふ処に。されども緩怠なき由聞し召し開かれ。安堵の御教書を賜はり悦びの色をなし。只今本国信濃に下向仕り候。急ぎ候ふ間。近江の国守山の宿に着きて候。今夜は此宿にとまらばやと存じ候。いかに誰かある。

狂言
「御前に候。」

ワキ
「今夜は此宿にとまるべし。宿を取り候へ。又存ずる子細のある間。某が名をば申すまじく候。」

狂言
シテ
「畏つて候。いかに此屋の主の渡り候ふか。」
シテ
「誰にて御座候ふぞ。」

狂言
シテ
「是は信濃の国へ御下向の御方にて候。御宿を申され候へ。」

シテ
「心得申し候。さて御名字をば何と申す人にて御座候ふぞ。」

狂言
「是は信濃の国に隠れもなき大名。望月の秋長殿。
……では御座ないぞ。」

シテ 「苦しからず候。此方へ御入り候へ。

狂言
「心得申し候。いかに申し上げ候。此方へ御通り候

ヘ。

シテ 「言語道断の事。我頼み申して候ふ人の北の御方。

同じく御子息花若殿此屋にとゞめ申して候ふ処
に。花若殿御親の敵。望月が泊りて候ふ事は候。
やがて此由申し上げばやと存じ候。や。いかに申
し候。不思議なる事の候。今夜此処に望月が着き

子方 「何望月と申すか。

シテ 「暫く。あたり近く候。まづ静まつて聞し召され候
へ。只今申す如く。望月が此屋に泊りて候。是
は天の与ふる所と存じ候。如何にもして今夜の内
に。御本望達せさせ参らせうするにて候。御心や
すく思し召され候へ。急度思案仕りたる事の候。
今頃此宿にはやり候ふものは盲御前にて候。何の

苦しう候ふべき。夜にまぎれ杖にすがり。花若殿に御手を引かれさせ給ひ。盲の振舞にて座敷へ御出で候へ。某彼者に酒をすゝめ候ふべし。又何にても候へ御謡ひあれと申し候はゞ。そと御謡ひ候へ。花若殿は八撥を御打ちあらうするにて候。某は獅子舞をまなび。其まぎれに近づきて。本望を遂げさせ申さうするにて候。

女「兎も角もよきやうに計らひて給はり候へ。

シテ「何事も某に御任せ候へ。

女サシ「嬉しやな望みし事の叶ふよと。盲の姿に出で立てば。

子方「習はぬ業も父の為め。

女「竹の細杖つきつれて。

地「彼蟬丸の古へ。く。たどりたどるも遠近の。道のほとりに迷ひしも。今の身の上も。思ひはいかで劣るべき。かゝる憂き身の業ながら。盲目の身

のならひ。歌きこしめせや旅人よ。歌きこしめせ

や人々。

シテ詞 「いかに申すべき事の候。

狂言 「何事にて候ふぞ。

シテ 「此屋の亭主にて候ふが。めでたき御下向にて候ふ間。御祝ひの為に酒を持たせて参りて候。然るべきやうに御申し候へ。

狂言

「心得申し候。いかに申し上げ候。此屋の亭主御下

向めでたき由申し候ひて。御樽を持たせ参りて候。
「此方へと申せ。

ワキ詞

狂言 「畏つて候。此方へ御参り候へ。また是なる人達は
いかなる人にて候ふぞ。

シテ 「さん候是は此宿に候ふ盲御前にて候。かやうの御
旅人の御着の時は。罷り出で謡などを申し候。御
前にてそと御うたはせ候へ。

狂言 「日本一の事にて候。やがて申し上げうづるにて候。

いかに申し上げ候。

ワキ 「何事ぞ。

狂言 「あれに候ふは。此宿にある盲御前にて候ふが。け
しからず面白く謡ふ由を申し候。謡はせられ候へ。

ワキ 「汝所望し候へ。

狂言 「畏つて候。なふ是なる人達。御所望にて候ふぞ面
白からんずる処を一節御うたひ候へ。

女詞 「一万箱王が親の敵を討つたる処をうたひ候ふべし。

狂言 「いや／＼思ひもよらぬ事にて候。

ワキ 「何事を申すぞ。

狂言 「是なる人達に謡を所望仕り候へば。一万箱王が親
の敵討つたる所を謡はうづる由申され候ふ程に。
御前にてはいかゞと存じいやと申して候。

ワキ 「何の苦しう候ふべき急いで謡はせ候へ。

狂言 「さらば今の仰せられたる処を御謡ひ候へ。

女クリ 「夫れ迦陵嚧伽は卵の内にして声諸鳥にすぐれ。

地 「鷺といふ鳥は小さけれども。虎を害する力あり。

女サシ 「こゝに河津の三郎が子に。一万箱王とて。兄弟の

人のありけるが。

地 「五つや三つの頃かとよ。父を従弟に討たせつゝ。既に年ふり日を重ね。七つ五つになりしかば。いとけなかりし心にも。父の敵を討たばやと。思ひの色に出づること。げにあはれには覚ゆれ。

クセ 「ある時兄弟は。持仏堂に参りて。兄の一万香を焼

き。花を仏に供ずれば。弟の箱王は。本尊をつくぐと守りて。いかに兄御前きこしめせ。本尊の名をば我敵。工藤と申し奉り。剣をひとつさげ縄を持ち。我等を睨みて。立たせ給ふが憎ければ。走りかゝりて御首を。打ち落さんと申せば。兄の一万これを聞きて。

女 「いまくし。いかなる事ぞ仏をば。

地 「不動と申し敵をば。工藤といふを知らざるか。さ

ては仏にてましますかと。抜いたる刀を鞘にさし。

ゆるさせ給へ南無仏。敵を討たせ給へや。

子方詞「いざ討たう。」

狂言「あう討たうとは。」

シテ「暫く候。何事を御騒ぎ候ふぞ。」

狂言「御用心の時分にて候ふに。是なるをさなき者がいざ討たうと申し候ふ程に候ふよ。」

シテ「子細を御存じ候はぬ程に尤にて候。此者の謡ひを

申ししたる後には。又をさなき者八撥を打ち候。其八撥を打たうずると申す事にて候。

狂言「日本一の事やがて打たせうずるにて候。いかに申し上げ候。是なる幼き者が八撥を打つべき由を申し候。」

ワキ「急いで打たせ候へ。又亭主は何にても能はなきか。」

子方「獅子舞を御所望候へ。」

ワキ「あら面白の事を申すものかな。いかに亭主。是な

る幼き者の申すは。亭主は獅子舞が上手なる由を申し候。そと一さし舞ひ候へ。

シテ「是は幼き者の筋なき事を申し候。思ひもよらぬ事にて候。

ワキ「ひらに舞うて見せ候へ。

シテ「此上は御意にて候ふ程に。そと御前にて舞はうずるにて候。此まゝにては如何にて候ふ間。獅子頭をかづきて参らうするにて候。其間に此幼き者に八撥を打たせ候ふべし。皆々かう渡り候へ。

子方一声「吉野龍田の花紅葉。

地「更科越路の月雪。(子方羯鼓)

地「獅子団乱旋は時を知る。雨村雲や騒ぐらん。(獅子舞)

地「あまりに秘曲の面白さに。く。猶々めぐる盃の。酔を勧めばいとゞなほ。眠りも来るばかりなり。

シテ「さるほどにく。

地「折こそよしとて脱ぎおく獅子頭。又は八撥を。打

てや打てと。目を引き袖を振り。立ち舞ふ氣色に
戯れよりて。敵を手ごめにしたりけり。

ワキ詞
「そもそも是は何者ぞ。

子方
「御身の討ちし安田の庄司が。其子に花若われぞか
し。

ワキ
「さて亭主と見えしは誰なれば。かやうに我をたば
かりけるぞ。

シテ
「小沢の刑部友房よ。

ワキ
「あら物々しと引き立て行けば。

シテ
「引つ据ゆる。

ワキ
「振れども切れども。

シテ
「放さばこそ。

地
「此年月の恨みの末。今こそ晴るれ望月よとて。思
ふ敵を討つたりけり。

地
「かくて本望遂げぬれば。く。彼本領に立ち帰り。
子孫に伝へ今の世に。その名隠れぬ御事は。弓矢

のいはれなりけり。

く。
。

底本：国立国会図書館デジタルコレクション
『謡曲評釈 第八輯』 大和田建樹 著